

「ウォール街の残影」

増山雄三

旧居留地があった、神戸市街の中心部を通っていた「栄町通」は、メリケンパークの北側を、幅十八米の大木さで、約一^キの長さで東西に延びていたものだが、それは、開国間もない明治六年（一八七三年）に開通した、いわば市のメインロードでもあった。

この栄町通は、翌年に開業した国鉄の神戸駅と居留地を結び、ミナト神戸発展の原動力となっていたが、これを計画したのは、それにより港都を発展させようと、越前福井出身の、関戸由義が骨格を描いたのだ。

また、昭和二十六年（一九五一年）の設立から、今年で七十周年を迎える、金融機関の兵庫県信用組合（けんしん）は、移転はしたが、この栄町通を離れた事はない。

理事長の土肥貴弘さんは、昔は「東洋のウ

オール街」と呼ばれていたそうだが、今はマ
ンション街になってしまい、働く場所から住
むところになってしまった、と解説するが、
上階の理事長室の窓からは、対面に聳える三
十三階建ての、タワーマンションが見える。
明治期の栄町通の輝きは伝説的で、界限を
歩いた正岡子規は、「その美、その壮、実に
名状すべからず」と評したというが、明治末
期には市電も開業し、大正になると第一次大
戦の好景気に沸き、三井・三菱を凌いだ巨大
商社の、鈴木商店の繁栄もあった。
かつて、資本主義の中枢と言われた、米ウ
オール街の歴史は、好景気・バブル・暴落・
恐慌と、光が強烈ながら影もまた色濃く、そ
れは、バンカーたちの栄光と挫折、それに希
望と絶望に繋がっていた。
それで、東洋のウォール街の面影を求め栄
町通を歩くと、近代建築の父といわれた、辰
野金吾が設計の名建築で、高さ九米のイオニ
ア式円柱が六本並ぶ偉容で有名だった、旧三

井銀行神戸支店の石材が、先のタワマンの入
口付近に、阪神・淡路大震災で倒壊した御影
石の石材が、無造作に置かれていた。
「思い出深い神戸支店が、見るも無残に崩
壊しているのを見て、無念さがこみ上げるの
を抑える事ができなかつた」と、当時の銀行
会長の宮崎邦次はいつたが、二年後の総会屋
利益供与事件の渦中、自ら命を絶った男だ。
そのあと、南西方向にさらに歩くと、地下
鉄「みなと元町駅」の出入口に、ヴィクトリ
ア調の赤レンガ壁が立っているが、それは、
辰野金吾設計の素晴らしい銀行建築で、震災
で大きく損壊してしまつたものを、景観維持
のため壁を整備し、一見、建物かと錯覚する
が、裏にはマンションがあるので、いわば、
「薄皮」の保存策ともいえよう。
その途上に、築百年の近代建築を見つけた
が、それは米穀卸の「神明」（が別館として
使っているもので、大正十年一九二一年）に
建設されたものだが、あかふじ米で知られる

神明は、今年で操業百二十年になる。

「栄町通は、神戸が栄えた時代の通りなので、当時の雰囲気を残したい」と、ここで執務する、八十四才になるホールディング顧客の藤尾益也氏は、笑顔で話してくれた。

令和三年五月